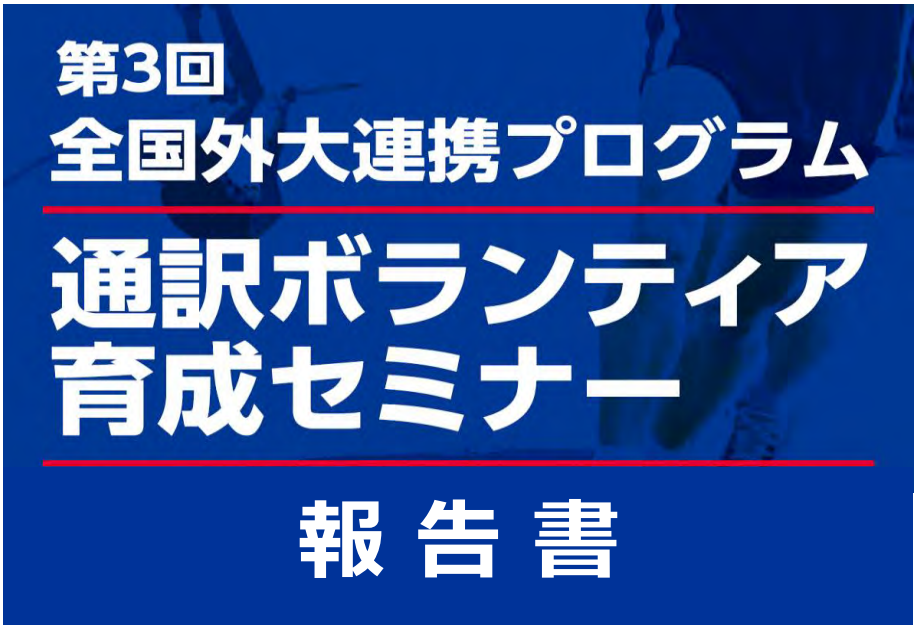
2016年11月15日



主 催

全国外大連合

開催日程

2016年9月6日（火）～9日（金）

開催場所

神田外語大学（千葉県）

後 援

文部科学省　外務省　観光庁　千葉県
2017札幌アジア冬季大会組織委員会
2018平昌(ピョンチャン)オリンピック・パラリンピック大会組織委員会
公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019組織委員会
公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会
一般社団法人 関西ワールドマスターズゲームズ2021組織委員会
NPO法人 日本オリンピック・アカデミー
一般社団法人 全国外国語教育振興協会

協 力

公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
一般社団法人 ホスピタリティ機構

目　次

1. セミナー概要　・・・p. 3
1-1 大学別の事前申込者数と受講者数
1-2 第1回～第3回までの受講者数推移
1-3 学年別受講者数
1-4 男女別受講者数
1-5 対応可能言語
1-6 大学別の人材バンク登録者数

2. 学生の参加動機　・・・p. 6
2-1 参加目的
2-2 参加へのきっかけ

3. 参加後の自己評価　・・・p. 7
アンケートによる集計

4. 各講義内容について　・・・p. 9
講義名
講師名
参加者課題『講義レポート』より

5. セミナーの様子（写真）　・・・p. 33

1. セミナー概要

1-1 大学別の仮申込者数と受講者数

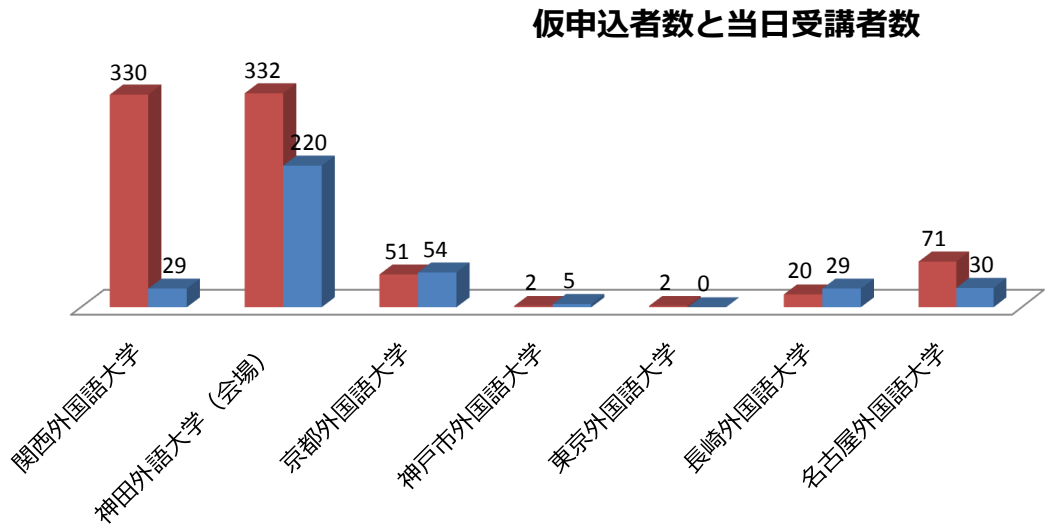
単位：人

大学名	仮申込者数	募集枠（英語）	募集枠（英語以外）	当日受講者数	バンク登録者数
関西外国語大学	330	20	各言語40名 ・中国語 ・韓国語 ・スペイン語 ・ポルトガル語	29	29
神田外語大学（会場）	332	120		220	204
京都外国語大学	51	20		54	53
神戸市外国語大学	2	20		5	5
東京外国語大学	2	20		0	0
長崎外国語大学	20	20		29	25
名古屋外国語大学	71	20		30	30
合計	808	240	160	367	346
		400			

1-2 第1回～第3回までの受講者数推移

単位：人

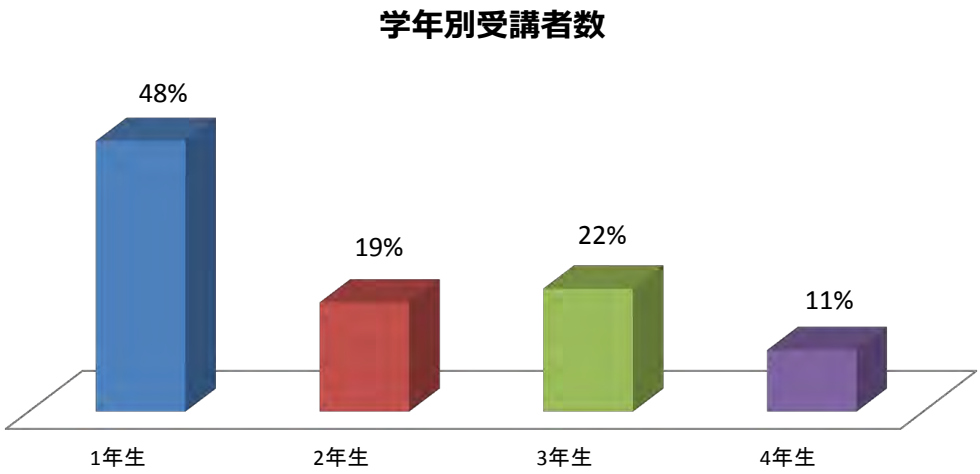
大学名	第1回	第2回	第3回	各大学総受講者数
関西外国語大学	27	24	29	80
神田外語大学（会場）	119	120	220	459
京都外国語大学	27	21	54	102
神戸市外国語大学	9	4	5	18
東京外国語大学	6	1	0	7
長崎外国語大学	21	13	29	63
名古屋外国語大学	27	14	30	71
回毎の受講者数	236	197	367	800
受講者数推移（延べ数）	236	433	800	



1-3 学年別受講者数

単位：人

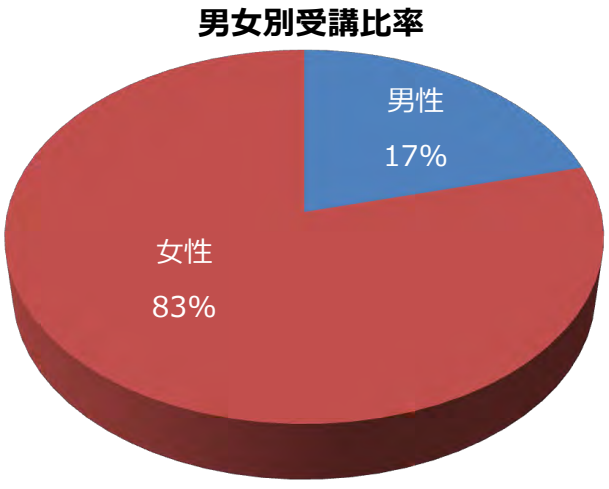
大学名	BASICコース		INTERMEDIATEコース		大学別計
	1年生	2年生	3年生	4年生	
関西外国語大学	1	12	8	8	29
神田外語大学	137	33	35	15	220
京都外国語大学	13	15	18	8	54
神戸市外国語大学	0	2	1	2	5
東京外国語大学	0	0	0	0	0
長崎外国語大学	8	0	16	5	29
名古屋外国語大学	17	9	2	2	30
学年別計	176	71	80	40	367



1-4 男女別受講者数

単位：人

大学名	男性	女性	大学別計
関西外国語大学	4	25	29
神田外語大学	45	175	220
京都外国語大学	15	39	54
神戸市外国語大学	1	4	5
東京外国語大学	0	0	0
長崎外国語大学	4	25	29
名古屋外国語大学	8	22	30
男女別計	77	290	367

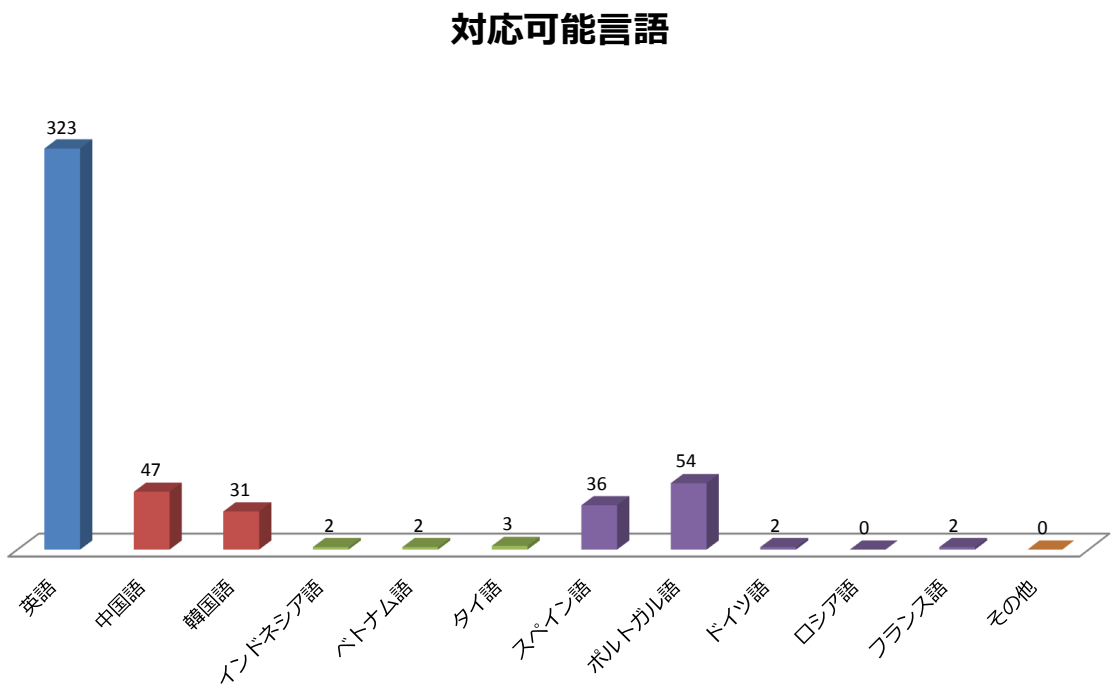


1-5 対応可能言語

単位：人

英語	中国語	韓国語	インドネシア語	ベトナム語	タイ語
323	47	31	2	2	3
スペイン語	ポルトガル語	ドイツ語	ロシア語	フランス語	その他
36	54	2	0	2	0

※受講者の対応可能言語内訳を示す。



1-6 大学別の人材バンク登録者数

単位：人

大学名	第1回	第2回	第3回	各大学 総登録者数
関西外国語大学	27	24	29	80
神田外語大学（会場）	106	111	204	421
京都外国語大学	27	21	53	101
神戸市外国語大学	9	4	5	18
東京外国語大学	4	1	0	5
長崎外国語大学	20	13	25	58
名古屋外国語大学	26	14	30	70
回毎の登録者数	219	188	346	753
登録者数推移（延べ数）	219	407	753	

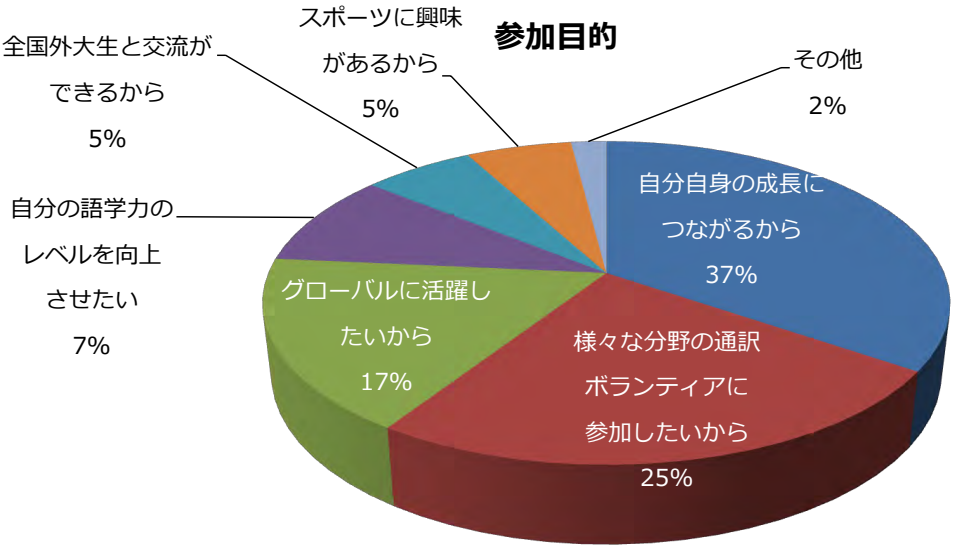
2. 学生の参加動機

2-1 参加目的

単位：人

参加目的	回答数
自分自身の成長につながるから	122
様々な分野の通訳ボランティアに参加したいから	87
グローバルに活躍したいから	61
自分の語学力のレベルを向上させたい	33
全国の外大生と交流ができるから	22
スポーツに興味があるから	21
その他	7

回答者数：353人

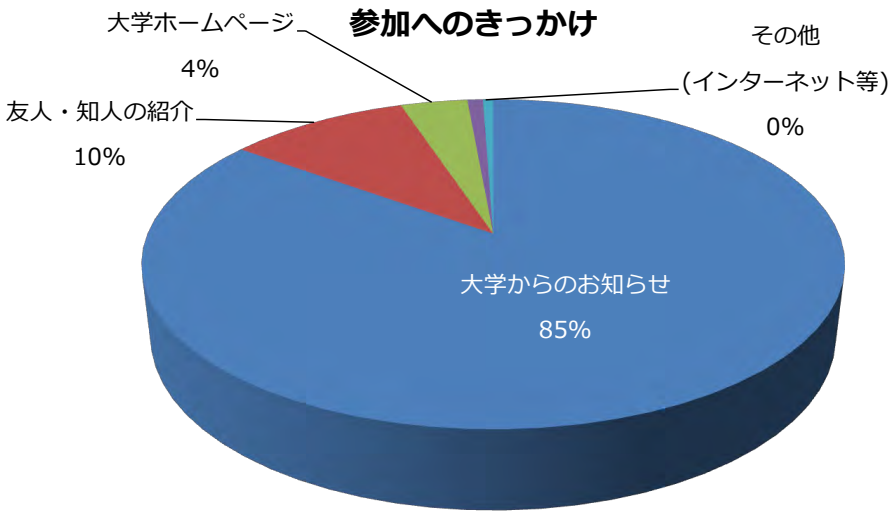


2-2 参加へのきっかけ

単位：人

参加へのきっかけ	回答数
大学からのお知らせ	300
友人・知人の紹介	35
大学ホームページ	13
新聞記事	3
その他（インターネット等）	2

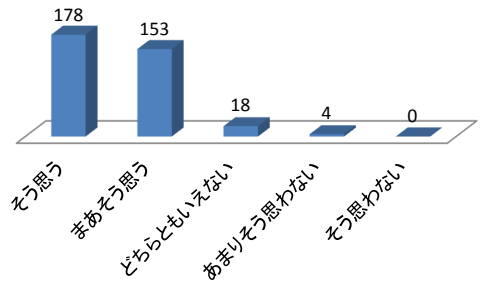
回答数：353人



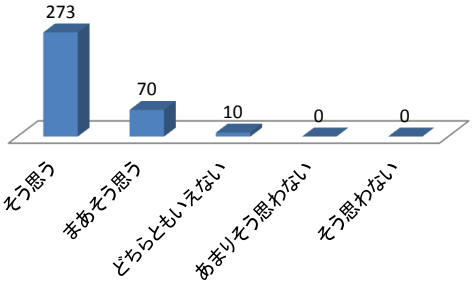
3. 参加後の自己評価 ― アンケートによる集計（単位：人）

回答者数： 353人

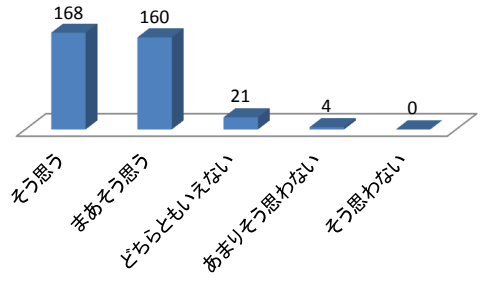
1. セミナーを受講してグローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった



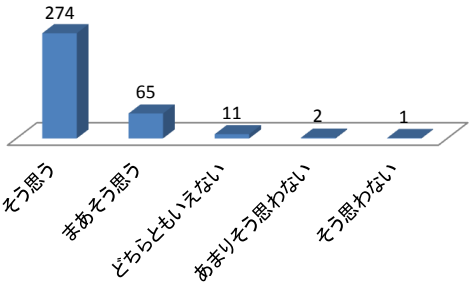
2. 語学力とコミュニケーション力の必要性ついて学ぶことができた



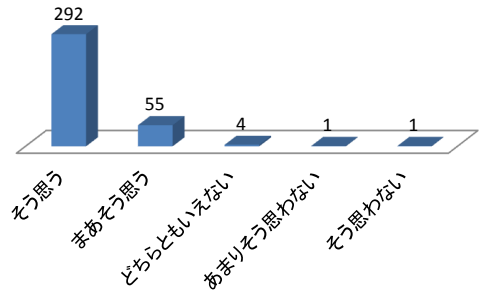
3. スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった



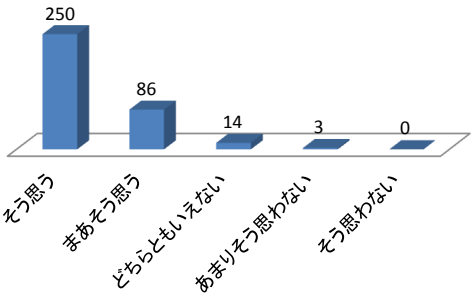
4. 参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった



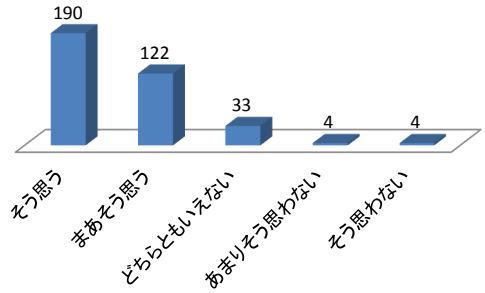
5. 今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい



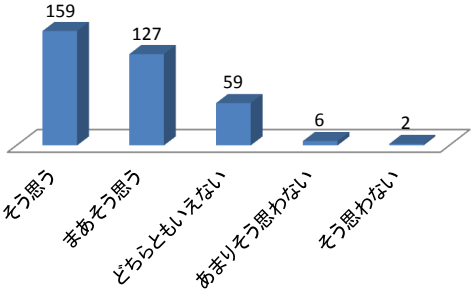
6. 受講前よりスポーツを通じて異文化・国際交流に興味が湧いた



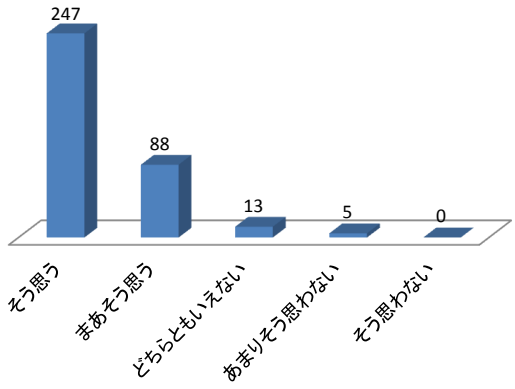
7. 日本人としてのアイデンティティについて考えるようになった



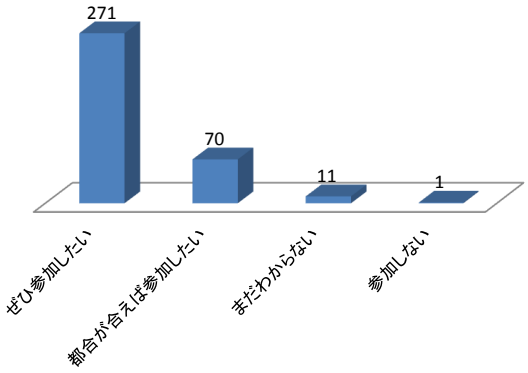
8. 自分の興味・関心がある分野に気付き、新たな自分を発見した



9. このセミナーを受講して満足している



10. 将来今後開催予定の世界的競技大会に
通訳ボランティアとして関わりたいですか？



11. 『このセミナーを通してのご感想やご要望、ご質問、運営についてお気づきの点等ご記入ください。』への回答内容

回答内容	回答件数
学習意欲向上や活動参加へのモチベーションアップにつながった	41
自分のためになった、よい経験になった、視野が広がった	39
充実した濃い4日間だった、また参加したい	33
質疑応答時間・休憩時間を確保してほしい	25
他外大の学生とつながった、交流できた	24
講義の質が高い、有意義だった	23
実践的に通訳スキルを学ぶ講義をもっと増やしてほしい	18
講義形式が多い、グループワークやアクティビティがほしい	17
同大学および他大学間それぞれで交流ができる場がもっとほしい	11
運営がよかった	8
自国のことやアイデンティティを知ることが必要だと感じた、興味を持った	6
受講言語の講義や西日本関連の講義を増やしてほしい	5
出欠を厳格化したほうがよい	2
スポーツに関心がわいた	2
アクティビティが楽しかった、ためになった	2
もっと期間を延ばしてほしい	2
もっと期間を短くほしい	2
参加者の態度が良くなかった	2
通訳クラスのテレビ画面が小さい	1
他国や異文化に興味を持った	1
ACPのグループ分けを言語別にしないでほしい	1
外国語に精通する企業の話をもっと聞きたい	1
グローバルに考えられるようになった、視野が広がった	1
講義内容を事前に教えてほしい	1
懇親会は最終日が良かった	1
受講料を安くしてほしい	1
食事が満席だったのでスペースを確保してほしい	1
日韓外大連合を作ってほしい	1

※上記「回答内容」に当てはまる回答を「回答件数」としてカウント。　　回答件数合計：272件

4. 各講義内容について

9/6(火)	基調講演
講演者	2018平昌冬季オリンピック・パラリンピック大会 副事務総長（2014.10～） 韓国政府文化体育観光部 観光局長（2014.1～10） 韓国政府文化体育観光部 体育局長（2009.8～2012.2） 韓国大統領表彰状 授与（1999.12） **金 キホン　Kim Kihong**
通訳 （学生）	神田外語大学 国際コミュニケーション学科3年 第2回通訳ボランティア育成セミナー修了 **須藤 一流**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆2018年の平昌冬季オリンピック・パラリンピック大会についての運営計画や開催効果、通訳ボランティアの概要について学んだ。2018年の平昌冬季大会を皮切りに、2020年の東京夏季大会、そして、2022年の中国冬季大会と、東アジアで大会が立て続けに開かれることで、世界各国の注目がアジアに集まることに言及し、３か国同士が協働することで、東アジア全体の成長をさらに促すことができると話した。通訳ボランティアは、日本だけではなく他国での活動に参加する可能性もあり、語学力だけではなく、他国の人々とのコミュニケーション能力や異文化への理解も重要だと感じた。（関西外国語大学・4年）

◆今回のセミナーの為にわざわざ韓国からお越し頂いたと聞いて、驚いたのと同時に金先生のお話をお聞きすることのできるとても貴重な機会なのだと改めて感じました。金先生のお話の中で一番印象に残っているのは、同じアジアを代表する日本・韓国との過去と将来の関係についてお話しなさっていたことです。歴史を通して日韓の今までの関係は不安定であり、友好関係であるとはあまり言えない時期もあったが、これからは平昌冬季オリンピックと東京オリンピックをきっかけに、アジアを代表する国同士としてお互いを助け合って高め合うことのできる関係になりたいとおっしゃっていました。そして、４年後の東京オリンピックにうまく繋げられるように平昌冬季オリンピックを成功させたいとおっしゃっていた時は、自国の成功だけを考えているのではなく日本の成功をも考えた上で取り組んでいるのだと気づき、とても心強いなと感じました。スポーツの一大イベントであるオリンピックを通して、日韓の将来の関係をもより良い方向に築くことができれば良いなと改めて感じた講演でした。（神田外語大学・4年）

◆オリンピックのボランティアの人たちは、その国に来た人が初めて接する人である。つまりボランティアの親切さがその国の評価につながる。だからこそ、ボランティアの人たちも日本代表としての意識を持ち行動するべきだと考えたる。また、日本や中国、韓国のアジアでのオリンピックを成功させるためにこの三ヵ国が理解し合い、これを機に関係を改善し、アジアの素晴らしさを世界に伝えてほしい。（京都外国語大学・2年）

9/6(火)	スポーツ文化・教養①
講師	東京大学大学院情報学環教授／副学長 **吉見 俊也**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆1964年と2020年の東京オリンピックの違いについて学んだ。1964年では戦災をきっかけに早く・力強く・成長することを求められていたのでインフラ整備などアメリカに追いつけ追い抜くような考えだった一方、2020年の東京オリンピックは東日本大震災において復興であり、日本という国の成熟を目的とするものであるということに共感した。しかし、震災における復興であるといいつつ東京のみで行われるオリンピックに違和感を感じていた。やはり復興であることは地方であり、地方がどれだけ活性させるかも今後の日本の課題であると考えられる。そこで上野の活性化が地方活性化につながるというが、私は未だに不安視をぬぐいきれない。なのでいくら東京を活性化させても東北や地方などへの活性化は難しいのではないかと考える。また、東京として文化の尊重・存続をすすめるべきであることは確かである。2020年のオリンピックを最終目的にするのではなく、今後にもつなげ発展する必要があると考えるところに共感した。（神田外語大学・4年）

◆1964年の東京オリンピックと2020年の東京オリンピックを比較しながらの講演で非常に分かりやすかったです。あと4年後に迫った東京オリンピックですが、課題が山積みとなっています。1964年のオリンピックは戦後の高度経済成長期の時期であり、「速く・力強く・成長する」で成功を収めることができたかもしれません。しかし、今回の講演でおっしゃられたことは、昔と同じように準備してはいけないということです。現代の日本は震災後で、「愉しく・末永く・再利用する」という新たな心持でオリンピックに臨むということが必要だということが分かりました。あと4年ですべての準備が間に合うのか否かという瀬戸際に今立たされている状況ですが、昔とまた異なった東京オリンピックを世界の人々に魅了できる日本であってほしいと願っています。（長崎外国語大学・3年）

◆オリンピック・パラリンピックを今まで考えていたものとは違うものに大きく転換してくれた授業になった。1964年の東京オリンピックと未来の2020年のオリンピックとをどうつなげるのか、という視点を持ったことがこの講義を聞くまでなかった。私の中では、その時は観ていないというのもあるだろうが、別物のような気がしているのにも関わらず、日本人の気質も相まって、前回のオリンピックを引きずっているという。ひどく惹かれる内容だった。あのころとはおかれている環境は全く異なっているのに、同じような形で成功させようとしていること。64年の東京オリンピック選手の内実について正直なにも知らなかったということに気づかされました。また、これから東京をより魅力的にさせていく計画も、私たち日本人の方がわくわくするようなもので、未来には多くの問題を抱えていて暗く思えるけれども、希望が見えた感覚も覚えました。私自身が今までに持っていた考えは固定されていたものであったと気づくことができたし、だからこそ、もっと様々なものを包括的にみたり、異なる観点から見てみようとする気持ちを持ち続けたり、好奇心の赴くままに調べてみたりして、視野を広げられるようにしたい。そしてそこから学んだものを生かして、自分を成長させていきたいし、少しでも明るい未来づくりに貢献できる人材になっていたい、と想えるようになりました。（名古屋外国語大学・1年）

9/6(火)	スポーツ文化・教養②
講師	筑波大学体育系／教授 日本スポーツ社会学会会長、日本体育・スポーツ政策学会理事 日本体育学会体育社会学専門領域代表 **菊 幸一**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆菊先生の講義では、スポーツに関する特徴についてのお話がありました。スポーツは、internationalではなくglobalなもので国境がないということ、またスポーツとは、requireなものではなく”楽しみであり娯楽”なんだということをおっしゃっていました。その中でも、スポーツは”自発的”な運動であり、”人類共通の文化”なんだとおっしゃっていたことが一番記憶に強く残っています。アスリート達の自発的な娯楽の楽しいスポーツのサポートを通訳でできるというのは、素晴らしいことなんだなと感じました。（関西外国語大学・3年）

◆本来のスポーツにおける意義を考えさせられるものであった。スポーツが古来、労働からの解放、退屈からの解放と成長していき、現代のスポーツまで繋がっていることにとても驚いた。 また、日本では欧米に追いつけ追い越せの風潮から、勝敗の価値が重要視されていたことも、当時の歴史背景から見て分かる。ヨーロッパにおけるスポーツの"暇つぶし"という概念がとても面白かった。最後のスポーツは思想を超越する、という言葉は本当に素晴らしいものだと思う。未だ人種差別や宗教格差の残るこの世界で、スポーツにおいてはそのような諍いを超えて、人類の持つ力というものを進化させていけるものであってほしいと感じた。（神田外語大学・1年）

◆スポーツの発祥から現在に至るまでの目的の変化や、スポーツがもたらした効果の変化について学んだ。「好ましい（楽しい）スポーツ」から「望ましい（価値ある）スポーツ」へと変わり、宗教に関係なく人々が集うことができるグローバル宗教として、グローバル課題に対して大きな役割を担っていることもわかった。（京都外国語大学・1年）

◆今日の社会では、よく「グローバル」「インターナショナル」という言葉を耳にするが、この二つの言葉の違いは、「三次元的視界」であるか、「二次元的視界」かということだということを学習した。スポーツというものは万国共通の、様々な要素を含んだものであり、「グローバル」な存在でいる必要があるのだと理解した。（神戸市外国語大学・2年）

9/6(火)	スポーツ文化・教養③
講師	早稲田大学スポーツ科学学術院／教授 日本スポーツマネジメント学会／会長 JOCゴールドプラン委員会委員 一般社団法人 スポーツツーリズム推進機構 代表理事 **原田 宗彦**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆スポーツ都市戦略とオリンピックマーケティングを学び、スポーツイベントのもたらすスタティックなかつ持続的な磁力を知りました。五輪は世界最大のビジネスであり、特に観光業はハイブリッド産業で視野が広く広範囲な経済効果が期待される。外国人観光客は増えないが、一人一人の落としていく額が大きいので経済は安定する。これからのインバウンド」観光の急増とスポーツツーリズムの関心が高まることを期待したいです。（関西外国語大学・4年）

◆スポーツによるマーケティング戦略について講演を行ってくださった。スポーツイベントによって盛り上がるのは競技会場だけではなく、周りの商業施設や空港、宿泊施設またそこから観光へ出かけるルートも地域に大きな経済効果を生むことを学んだ。スポーツはその人を呼び込む力があるためそれを目的としてきた人々にプラスαでどのように消費活動を推進させていくかを考えることが経済の活性化につながることがわかった。（神田外語大学・2年）

◆現在では、アマチュアイズムからビジネスイズムになりスポーツ都市戦略はスポーツツーリズム、つまりスポーツで人を動かす仕組みづくりによる地域の活性化をしようとしている。スポーツツーリズムにより、2020年の東京オリンピックで日本だけでなく日本から世界を活性化できるのではないかと私は思う。そのようになっていくために今からでも通訳ボランティアという立場からスポーツに関わっていくためにたくさんの知識を得ていかなければならない。（長崎外国語大学・1年）

◆スポーツツーリズムと通訳、初めは何の関係があるのだろうかと思った。しかし、それは単にスポーツをしたり見たりするだけでなく、その地域を観光などで活性化もする。そのために訪れた方々との交流を保っていくという点で通訳が必要となると分かり、通訳としての役割の幅の広さに嬉しさと期待が高まった。（名古屋外国語大学・1年）

9/6(火)	スポーツ文化・教養④
講師	公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019 事務総長特別補佐 アジアアラビー会長 **徳増 浩司**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆徳増先生が仰った、”Take your opportunities!（ダメで元々）"という言葉にとても勇気付けられました。ラグビー日本代表が格上の南アフリカ代表に挑み大金星をあげたのは記憶に新しいですが、選手たちの心のどこかには「ダメで元々」の精神があったのではないかと思います。単純に考えれば日本代表が勝つ確率は低かったでしょうし、観戦したほとんどのサポーターが南アフリカ代表の優勝を信じて疑わなかったでしょう。日本代表が勝てたのは日々の厳しい練習と、不屈の精神、そして「ダメで元々」だからこそやってみようという気持ちのおかげだと思います。この「ダメで元々」という精神は私の英語の学習にも通じるところがあります。上手く喋れないし、聞き取れないから。だけど、とりあえず、ダメ元でぶつかってみようと思えました。（神田外語大学・1年）

◆この講義では、講師の方がウェールズで三ヶ月間生活された話を聞きましたが、三ヶ月経ったある日突然英語が話せるようになったと聞き、驚きました。個性とは「人と違う」こと、エンジョイとは「力を出し切る」ことだと話されていて、とても素敵な考え方だなと思いました。そして、take your opportunity というダメ元でもやってみるという意味の言葉を聞いて、私もその思いで様々なことに挑戦するべきだと思いました。（京都外国語大学・1年）

◆私が今セミナーに参加した理由の一つが、「東京オリンピックで通訳ボランティアとして活躍したい」と考えていたということがあるが、ラグビーワールドカップのことに関しては正直に言うと全く関心がなかった。しかしこの講義を通して、この大会にかける人々の熱い想いを感じられ、また自分を試すいい機会だと感じた。（神戸市外国語大学・2年）

◆2019年に日本でラグビーワールドカップが開催されることを知りませんでした。私の出身である熊本が会場の一つであることを大変嬉しく思います。絶対に熊本で地震は起こらないと言われていた矢先に、熊本も被災地の一つとなってしまいました。これを機に熊本も明るくなってほしいと願っています。地元で国際大会において貢献する機会はなかなかないと思うので、熊本または福岡で通訳ボランティアとして参加したいと思っています。（長崎外国語大学・3年）

9/7(水)	日本文化の理解
講師	青山学院大学日本文学科卒業 狂言師・和泉流二十世宗家 金城学院大学講師 祖父は人間国宝九世三宅藤九郎 NHK大河ドラマ「北条時宗」主演 13ヶ国30都市での海外公演など狂言の普及に努める **和泉 元彌** 日本女子大学文学部国文科卒業 狂言和泉流十九世宗家の和泉元秀の長女 平成元年 国立能楽堂において「史上初女性狂言師誕生記念公演」、同年文部大臣より感謝状授与、国際文化交流としての海外公演は13ヶ国30年に及ぶ **和泉 淳子** 青山学院大学法学部卒業 狂言和泉流十九世宗家和泉元秀の次女 平成元年 国立能楽堂において「十世三宅藤九郎襲名披露公演」、同年文部大臣より感謝状授与 平成24年 米国ノースダコタ州立大学英語狂言プロジェクト・製作 平成25年 英国リンカーン大学での"Women in Asian Theatre Symposium" 平成26年・28年 内閣対米後方事業"Walk in U.S. Talk on Japan"で渡米 **三宅 藤九郎**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆私は小学生の時に、同じ和泉流の方々に狂言を教わりました。その時も、セリフを言って振りをしたのですが、小学生の自分がやるのと大学生の自分がやるのでは感覚が違い、とても興味深かったです。大人になると、その分気付けることが多く、二度目なのに初めて学んだような気持ちになりました。この経験は日本人として世界に誇れるものであり、大切にしていきます。（神田外語大学・2年）

◆未だ人生の中で狂言というものに触れたことがなかったので、見るものや教わること一つ一つが全て新鮮で、大変興味深い講座だった。また、日本文化に含まれる「日本の心」の一端、例えば稽古前、後の一礼などを身をもって感じることで、日本人の精神などの再確認ができた。（神戸市外国語大学・2年）

◆初めて狂言という舞台を見て、演じて日本の伝統芸能を体験することができとてもいい経験になったと思った。狂言は、音なども自分の口で言葉で表現していて歌舞伎とは違う点を見つけられた。もし、海外の方に日本の伝統芸能のことを聞かれても答えられるようにスポーツだけでなく日本のこと全体を知らなければならないとわかった。（長崎外国語大学・1年）

◆この講義を通して、私は日本文化の一つである狂言を肌で感じ、体験をすることができた。私は狂言の中に日本人の礼儀正しさが出ていると思った。一つ一つの表現が正確でキレがあり、また日本文化特有の無言の美しさとも言うべきものを感じたから。例えば、物語の場面が変わるとき、役者を声を出さず、動きだけで観客に伝える。表情、動作、台詞、全てに注目してさらに自らのイメージも加えて始めて観ることになるんだと感じた。この深い文化こそ日本人らしさだと考える。しかし、日本文化の競技人口は減りつつあるので、例えば、訪日外国人のツアーに狂言体験講座を取り入れるべきだと私は考える。（名古屋外国語大学・1年）

9/7(水)	異文化理解	
講師	嘉悦大学 准教授 日本体育協会理事 公益財団法人 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 理事 **ヨーコ ゼッターランド**	Department of Asian and Middle Eastern Languages and Literatures Dartmouth College professor **ジェームス ドーシー**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆ヨーコゼッターランド先生：先生の出身地であるアメリカと、日本文化的違いを通して、コミュニケーションの違い、価値観、考え方の違いを学びました。コミュニケーションとは共感できなくても認識をすることだと聞いた時は私の考え方も少し変わりました。今までは共感できないと互いに上手くいかないと思っていたので、そうではないんだという事にはっと気付かされました。先生が最後に言っていたように、2020年に向けて、日本の技術と心を世界に発信する一員となれるように私自身頑張りたいと思いました。（関西外国語大学・2年）

◆ヨーコゼッターランド先生：講義を通じて思ったことは、異文化というと大変なことのように思われるのだが、要は目の前にいる相手のことを知って、そのうえで相手に対して誠実に向き合うことが出来ればいいのではないかな、ということです。異文化理解が必要な理由は、国や地域が異なることによって当然文化が違い、認識の齟齬が生まれるからであって、相手を理解すること自体が困難だからであるからだ、と関変えられるようになりました。せっかく親切な気持ちを持ってしたことでも、相手にとって侮辱ともとれる行為であったら行動の意味が無くなります。だからこそそれを避けるためにコミュニケーションが必要なのだと、再確認できました。講義の『共感できなくとも認識できる』という言葉はまさにこの状態を的確にあらわしているな、と印象に残りましたし、心に持ち続けていきたい言葉だとも思えました。（名古屋外国語大学・1年）

◆ジェームスドーシー先生：異文化理解についての講義で、少人数でディスカッションする時間もあり、他の授業に比べコミュニケーションをとることができた。文化というものは様々なグループによって構成されるものであり、そのグループに生きる個人がアイデンティティーを形成する。そのため文化は多岐にわかれ、異文化となりこれを理解するということは必ずしも容認するとは限らない。私は異文化理解に一番必要なものはより多くのグループを知ることから始まると考える。（京都外国語大学・4年）

◆ジェームスドーシー先生：自己紹介という基本的な会話の中にも文化の違いが見え、面白いと思いました。自分のアイデンティティーをしっかりと持ち、相手の文化を尊重できるグローバル人材になりたいと思いました。（神戸市外国語大学・4年）

9/7(水)	ホスピタリティマインド
講師	ホスピタリティマインド ロンドン大学クイーンメアリーカレッジ予備コース学生コンサルタント 明治大学リバティ・アカデミー／講師 一般社団法人 ホスピタリティ機構／理事長 **野口 幸一**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆今までなんとなくホスピタルティについて理解しているつもりだったけどこの授業を受けて接客だったり、コミュニケーションは奥深いのだなと思いました。相手のことを知るためには目を見てよく会話することが大切だし、最初のはじまりして言語は大事なツールだと考えられさせられました。ホスピタリティ検定にも興味を持ちました。（京都外国語大学・3年）

◆私は高校時代にまさに「ホスピタリティマインド」という授業があったためにとても入りやすいと感じた。五輪招致の時に注目を浴びた「おもてなし」。これこそまさにホスピタリティマインドではないだろうかと思う。通訳ボランティアは選手の言葉の壁を取り除くことはもちろん、その選手のサポートも業務に含まれるとするならば、ホスピタリティマインドは欠かすことができない要素であると思うので非常に有意義に感じた。ただホスピタリティマインドとは何かということを漠然と講義するのではなく、セミナー参加者同士で議論や意見の共有も活発に行われさまざまな視点や意見を知ることができ、高校の時に得た知識をさらに広げ、深めることにつながったと感じた。授業自体が一コマ分なのでディスカッションに時間の制約がかなりあったことが残念に思う。もう1コマくらいの時間があればという風に感じた。（神田外語大学・2年）

◆知っているようで、できていないことに気づいたり、相手を喜ばせる気持ちがいかに大切なのか学びました。話し方、振る舞い方一つで相手に与える印象を変え、人間関係に影響を及ぼすことになるので、コミュニケーションの難しさや大切さを感じました。（神戸市外国語大学・4年）

◆ホスピタリティーマインドは思いやりの心、助ける精神、多様性の受容ロールプレイが多かったと思います。相手の目を見て話すことの大切さを学びました。「公共交通機関で席を譲って逆に怒られた場合には、相手は本音では嬉しかったかもしれないが、見栄で断っているかもしれない。次の機会を考えましょう。」とのアドバイスがありました。ポジティブに考えることの有用さを教えていただきました。（長崎外国語大学・1年）

9/7(水)	アドベンチャープログラム	
講師	神田外語大学体育・スポーツセンター 教授・センター長 千葉県大学ラグビーフットボール協会理事（大学委員長、女子強化等） **市瀬 良行**	神田外語大学体育・スポーツセンター 講師 順天堂大学卒、筑波大学大学院修了（体育学修士） **江川 潤**

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆最初はみんな緊張していたが、一緒に体を動かしたり問題を解決していくうちに、打ち解けていくことが出来た。出会ったばかりの人でも一緒に運動をしたり同じ問題に一緒に取り組むことでこんなにも短時間で仲が深まり、親近感を持つことが出来るのだと知りとても驚いた。最初はみんなバラバラだったが、授業が終わる頃にはチームとしての一体感が生まれていてとても嬉しかったし、とても楽しい授業だった。（関西外国語大学・2年）

◆実際に体を動かし、初対面の人たちと1つの目標を達成するというこのアドベンチャープログラムの授業はとても面白い発見の連続であった。その中でも一番に驚いたのが、最初は名前すらも知らない人たちと一緒に目標を達成するために問題を解決しながらベストの状態に持っていく。この一連の流れの中で自然と皆がちゃんとコミュニケーションを取れている、ということである。更にこの問題が難しければ難しいほど互いの絆がどんどん深まっていくのを感じた。この講義では、スポーツの持つ力の大きさを肌で感じることができた。（神田外語大学・4年）

◆スポーツは何かから解放するためのだけでなく、人とコミュニケーションをとるためののツールでもあることが分かりました。凄く楽しい時間でスポーツをより理解するためにもなったと思いました。（京都外国語大学・3年）

◆自分自身スポーツがまったくできないので行く前から不安でしたが遊び感覚体を動かして楽しかったです。何か１つ成功したらなぜ出来たのかを考えることで、もう一度行動を振り返ることができて良かったです。また名前を覚える、呼ぶということがいかに大事かが分かりました。名前を呼ぶことが一番のコミュニケーションなのではないかなと思いました。（長崎外国語大学・4年）

9/8(木)	スポーツ通訳ボランティアとグローバル人材	
講師	上智大学文学部教授／保健体育研究室 日本ワールドゲームズ協会 執行理事 国際ワールドゲームズ協会 理事 スポーツアコード元理事、ラグビーワールドカップ2019組織委員会 顧問 関西ワールドマスターズゲームズ2021組織委員会 委員 **師岡 文男**	神田外語大学体育・スポーツセンター 講師 筑波大学体育系非常勤講師 2018平昌（ピョンチャン）オリンピック・パラリンピック大会 Launches Volunteer Recruitment Program 参与 **朴 ジョンヨン**
発表 （学生）	神田外語大学 英米語学科4年 2014 ソチ冬季オリンピック（ロシア）通訳ボランティア 2014 世界卓球東京大会事務局内インターン、大会通訳ボランティア 2014 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト優秀賞受賞 **樫村 真**	神田外語大学 英米語学科4年 2014 世界フィギュアスケート選手権大会 通訳ボランティア 2015 ジャパンパラウィルチェアラグビー大会 通訳ボランティア 2016 JICA青年海外協力隊短期ボランティア（ジンバブエ） 第2回通訳ボランティア育成セミナー修了 **佐久間 大樹**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆実際に通訳として活動している学生のお話を聞くことができてとても刺激になりました。スポーツが好きで、選手ではなく選手に関わるという形でスポーツに携わるという選択肢を見つけたのがすごいなと思いました。2人とも計画的に充実した大学生活を送っていたので、一生懸命通訳ボランティアの活動をしていくことは本当に素晴らしい経験だと感じました。（関西外国語大学・3年）

◆通訳ボランティアについてだけでなく、人として、また大学生としてこれから取り組んでいかなければならないこと、考えていかなければならないことをたくさん教えて頂いた。「やってみなければできるかどうかわからないのだから、とにかく自分のやりたいことをやってみるべき」というお言葉は特に印象に残った。私は臆病者なので、やる前にいろいろ考え過ぎて辞めてしまうことが本当に多く、そのせいでこれまで非常に多くのチャンスを逃してきたように思う。これからはあれこれ考える前に、「とにかく行動する」ということを意識して生活していこうと思った。グローバル・国際人には「専門性」「グローバルマインド」「チャレンジ精神」が必要と教わったため、これからは特に「専門性」をしっかりと磨いていこうと思った。また、実際に通訳ボランティアに参加している先輩学生のお話は、本当に印象に残った。"I may not be there, but I'm closer than I was yesterday." "Chance favours only the prepared mind." は本当に素晴らしい考え方だと思ったので、常に心に留めて、私も「誰にも負けない」という意識でこれから生きていこうと思った。（神田外語大学・3年）

◆朴先生の講義では、スポーツ通訳を通して、語学力、コミュニケーション力、責任・使命感、主体性や積極性を培うと同時に、アスリートとの交流によって自文化と異文化理解を深めると共に、グローバル視点のアップを図り、就活で求められる人材となることが出来るといったことを学んだ。特に印象に残った言葉が「Changing place」「Changing thoughts」「Changing time」「Changing future」で、これを念頭におき、今後の人生に活かしていきたいと思った。
師岡先生の講義の内容は、通訳を行うにあたっては、相手に信用してもらうため色んな教養を身につけ話のタネにする事、自国の文化をしっかりと知り異国の文化を受容すること、知らないことを知ったかぶりせず、正しく伝えることが大事であるというものだった。また、スポーツの範囲はチェスやブリッジなどのマインドゲームを含めると非常に幅広く、マイナー、メジャー関係なく様々な競技が行われているので思っている以上に通訳ボランティアの活躍の場が多いこと、スポーツ英語も覚えておくことが重要であるといった事を学び、今後スポーツ通訳を行うにあたってこれらのことを念頭において行おうと思った。（京都外国語大学・4年）

9/8(木)	アンチドーピング
講師	筑波大学体育系／准教授 第30回ロンドンオリンピック水泳代表チームドクター American College of Sports Medicine／日本臨床スポーツ医学会 日本体育協会公認スポーツドクター、日本障がい者スポーツ協会障がいスポーツ医 日本内科学会総合内科専門医 **渡部 厚一**

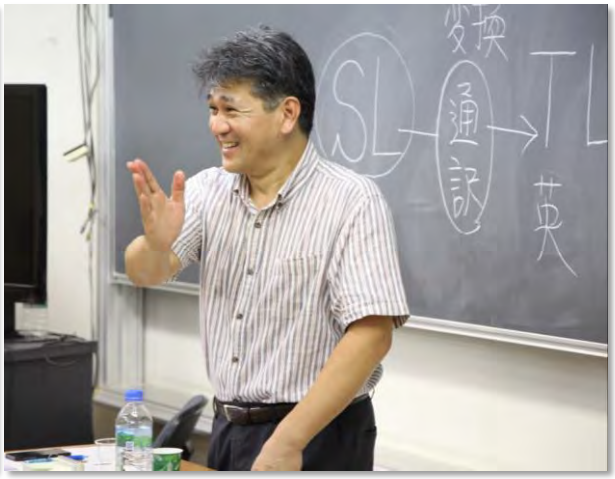
参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆ドーピングという言葉については、ハンマー投げの室伏広治選手が金メダルを取った時から知っており、最近ではロシアの問題も気になっていました。しかし詳しくは知らず、曖昧な知識のまま過ごしてしまっていたのでこの講義を聞くことにより、ドーピングについて深く学ぶことができてよかったです。検査器具や検査方法までは詳しく知らなかったので知識を増やすことができました。驚いたのはその検査を逃れるための器具も出回っているということです。その器具を購入し、駆使して検査を逃れようとする間にもっと練習できるのではないか、と思ってしまいました。いくら検査を逃れようと努力しても見つかってしまえば終わりなのだから、その労力を是非、他のところに使ってほしいと思いました。薬物がなくなり、クリアで平等なオリンピックができるような世界になればいいと心から思いました。（神田外語大学・3年）

◆ドーピングについて知識を深めることができた講義でした。医学に関する知識も大切だということ、選手を守る立場としての通訳にならなくてはならないこと、薬の成分が不明なものは選手に進めないことなど、選手の言葉の通訳以外にも大切な役割があることを知りました。今後の選手生命を犯す大きなリスクがあるにも関わらず、オリジナル装置を作ってでもドーピングを行う選手が存在したことには驚きを隠せませんでした。2020年の東京オリンピックでは、ドーピング０を目指せるような大会になってほしいと思いました。（京都外国語大学・4年）

◆最も驚いたのはドーピングの検査について。検査のための特殊な器具や、選手が受けている検査については今まで聞いたことがなかったため、とても貴重なお話を聞くことができたと思った。また、通訳の人が選手のドーピング検査に同行することがあるということも初めて知った。これまでドーピング検査について学ぶ機会はなかったが、通訳ボランティアをやろうとしている者としてこれらのことについてもさらに自ら学んでいく必要があると感じた。（名古屋外国語大学・2年）

9/8(木)	比較文化論（受講言語：英語）	
講師	神田外語大学英米語学科 准教授 （2016年度カナダ・ケベック大学モントリオール校客員教授） 東京外国語大学大学院 博士号（学術）取得 専門は社会言語学 **矢頭 典枝**	神田外語大学英米語学科 教授 Former Assistant Professor at Graduate School of Translation and Interpretation, Monterey Institute of International Studies **小坂 貴**



参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

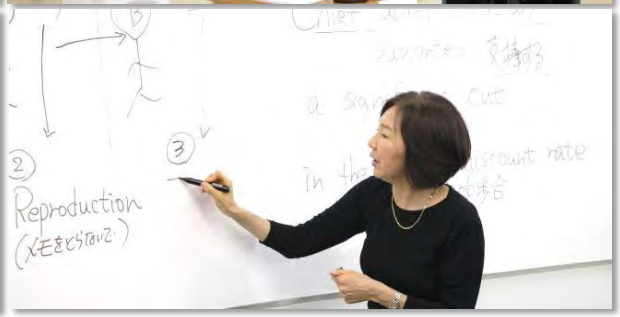
◆矢頭 典枝先生: 比較文化論の題材として様々な国の英語を比較するのが面白かったです。発音が違う、スペルが違う、語尾が特徴的...なんとなく聞いたことがあっても実際映像と音声で比べてみると全然違っていました。文化を理解するにあたり比べることで見えてくることもあると思うのでとても興味深い講義でした。東京オリンピックなど世界大会で考えると、同じ英語でも全く違うように発音する様々な国の人々が日本にやってきたとき、ちゃんと理解できるようにしていないと通訳もうまくできないのではないかと思いました。（関西外国語大学・2年）

◆矢頭 典枝先生：この講義では、英語のなかでもたくさんの発音があり、また国によってなまりがある。全然発音が違うことで今まで学習してきた英語とは違うものに聞こえてしまい意思疎通が難しくなってしまう可能性がある。そのようにならないために、私は留学をすることになったらその国の発音を勉強してから海外に行こうと思った。（長崎外国語大学・1年）

◆小坂 貴志先生：この講義では、先生の体験談や先生の知人の方の体験談からよりリアルな通訳ボランティアを学ぶことができました。どの競技の通訳をやるにしても、何をやるかは相手のリクエストに応じて変わってくるのだそうです。通訳以外の仕事も実際にたくさんあるそうです。先生のお話の中であったのは、観光のガイド役だったり、選手の奥様方とお花のお稽古をいっしょにしたり様々なものがありました。将来、通訳ボランティアをする機会があれば、もちろん通訳として参加しますが臨機応変に対応していきたいです。（神田外語大学・1年）

◆小坂 貴志先生：まずは、英語と日本語の特徴の違いや、文化の違いについて考えました。異なる言語や文化を持つ人々と接する上で、初めにその違いを理解しておくことはとても大切な作業であると思いました。また、スポーツ通訳ボランティアに参加させた方々の声を聞いて、どんな姿勢でボランティアに臨むべきか学ぶことが出来ました。その後は、ペアになって実際に通訳の練習をしました。メモを取りながら実践しましたが、分からない単語や表現などがあり、通訳の難しさを感じました。（名古屋外国語大学・4年）

9/8(木)	通訳・翻訳技法①②（受講言語：英語）	
講師	広島大学 医学部保健学科理学療法学専攻 卒業 東京大学大学院 総合文化研究科 理学療法士・ピラティスインストラクター・トレーニングコース通訳 **ラジカスキー（川原） 万由子**	マサチューセッツ州Wheaton College国際関係学士号 カリフォルニア州University of Southern Californiaビジネス修士号 日英通訳・翻訳、英会話講師、鍼灸マッサージ師国家資格及び教員資格 **水野 里香**
	NHK衛星スポーツでのアメリカ3大スポーツ中継番組やCNNワールドスポーツでの翻訳・ボイスオーバー。 2004年~2009年には、千葉ロッテマリーンズ球団でボビー・バレンタイン監督専属通訳 **中曽根 俊**	神田外語大学 英米語学科 通訳・翻訳課程特任講師 民間通訳養成スクール顧問 オーストラリア・クィーンズランド大学大学院 修士号（英日通訳・翻訳） **曽根 和子**



参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆ラジカスキー(川原)万由子先生: この講義では、医療の専門用語を多く学び、医者と患者の会話を手助けする通訳という役割がどのようなものか学びました。医療の用語は難しいものが多く、咄嗟に出てこないし、自分がけがをした時もそれを説明するのは思ったより難しいとロールプレイを通して感じました。スポーツに関わる通訳では医療面は切っても切れない関係なのでまだまだ語学を学ぶべきだと思いました。日常会話のさらに上を通訳の際には求められると再認識し、まずは日本語でも専門知識を身に着けることを始めようと思いました。（関西外国語大学・2年）

◆中曽根 俊先生：この講義ではイチロー選手入団会見の通訳や球場イベントでの通訳などを経験された中曽根先生に実際の通訳の現場を通しての、様々なことを教えていただきました。最後には質問の機会があり、通訳をしているなかで通訳相手が何を話したか聞き取れなかった場合はどのように対応したのか、英語の訛りでの苦労はなかったのか、など通訳の現場で起こりうる不安要素についても丁寧に答えてくださいました。実際に様々な経験をされた先生に直接お話を聞くことが出来て本当に励みになりました。（神田外語大学・1年）

◆水野 里香先生：私も海外留学中に怪我をしてしまい病院に通ったことがあるのですが、とても苦労した経験があります。まず、医療英語が分からず、どのように怪我したのか、怪我の症状がどのようであるかを説明するのに大変苦労しました。その上、お医者さんや看護師さんがおっしゃっている内容を理解するのにさらに苦労しました。スポーツは怪我や病気が多いですから、こういった医療英語を知っておくことは非常に必要不可欠だと思います。特に医療英語は専門的な単語を知っておかないと、全く通訳できない状況になってしまうので、勉強しておく必要性を感じました。（長崎外国語大学・3年）

◆曽根 和子先生：はじめて通訳法の機械を使った授業を体験しました。実際に録音してみると自分は至らない点が多いということを改めて感じ、通訳ボランティアをするためにはもっと自分自身で力をつける必要性を感じました。(名古屋外国語大学・4年)

9/8(木)	比較文化論（受講言語：中国語）
講師	神田外語大学アジア言語学科中国語専攻 教授 東京外国語大学大学院 地域研究科アジア・太平洋コース修了 専門は地域研究（中国）・比較文化研究 **花澤 聖子**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆この講義では日本と中国の文化の比較をしながら、どのようなシチュエーションで誤解が生まれやすいのかということを学んだ。私は1年間中国に留学していた中で感じた違和感などはほとんどが文化の差からきているものだということを説明してくださり、逆に中国人の学生はどのような日本の文化に違和を感じているのかという点についても学んだ。今回の講義を受けて、少しの文化の違いでお互いの関係性が悪くなってしまうのはとてももったいないことであると感じた。（神田外語大学・4年）

◆この講義を通して日本と中国の客観的に文化を見つめていて、まず、周りを配慮せず、誰問わず自分のことを話す中国の文化のほうが合ってるなと、違う国でも自分自身に合うところはあるんだなと思いました。そして何より感謝や謝罪が素直に言える日本の文化の素晴らしさを知った。そして、親が年老いてしまっても最後まで自分の身内に捧げる中国の絆の強さは素晴らしいなと感じました。中国の文化を馬鹿にする人もたくさんいるけどこのようにお互い持っていない部分があるからこそ、このような自分たちにはない部分を尊敬しあえる人を増やしていきたいと思いました。（京都外国語大学・3年）

◆この講義では、日本と中国の文化の違いを詳しく紹介していただきました。例えば、日本人は食べもどを全部食べ切るのは礼儀正しいのに対して、中国人は食べ物を少し残すという習慣を持っています。また、コミュニケーションの仕方の相違で摩擦を生じやすいケースも多くあります。そこで、日中交流の間で、違う国の文化を身に着ける上に行動したほうがいいと思います。（長崎外国語大学・3年・留学生）

9/8(木)	通訳・翻訳技法①②（受講言語：中国語）	
講師	神田外語大学アジア言語中国語専攻 講師 神奈川大学外国語研究科博士（文学） 専門は音韻学 音声学並びに中国語の方言 **山村 敏江**	神田外語大学アジア言語中国語専攻 講師 中国 華東師範大学博士（文学） **青野 英美**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆山村 敏江先生：中国の方言について主にやりましたが、１つ大きな課題が出来ました。英語などは正直どの国でもある程度聞き取れるとは思いますが、今日聞いた方言は全く理解できませんでした。同じ中国語でも全く違う発音がほとんどで、私が今後通訳をする時に、様々な地域から中国人が訪れると思いますがしっかりと理解できるのかとても不安になりました。しかし先生がおっしゃった、発音を聞いて、話の流れをよんで本当はこういう発音なんじゃないのかなと推測することが大切だというのは、本当にその通りだなと思いました。（神田外語大学・1年）

◆山村 敏江先生：先生は中国語の方言を研究されていて、講義はとても楽しいものでした。自分は中国人ですが、母語の方言が自分もたまに分別できません。講義中配られた資料は将来日中比較言語を勉強する時、大いに役に立ちそうです。（京都外国語大学・3年・留学生）

◆青野 英美先生：福原愛選手の中国語でのインタビューの動画を見ながら、実際に通訳をする練習をしました。中国語と日本語には文字数に差がある為、いかに簡潔に分かりやすく伝えるというのが大事なのか、ということを学びました。（京都外国語大学・3年）

◆青野 英美先生：この講義は、映像を見ながら翻訳するというものでした。中国のテレビ番組は中国語字幕がついているものが多いです。いつもドラマを見る時は字幕に目がいってしまうので、何となく意味が分かったり一時停止して単語を調べることもできます。しかし、通訳だとそれは通用しません。私は聴解が苦手なので克服するために勉強法を工夫して更に聴解力を高めたいと思いました。（長崎外国語大学・4年）

9/8(木)	比較文化論（受講言語：韓国語）
講師	神田外語大学体育・スポーツセンター講師 日韓スポーツ大会において韓国代表監督・選手団や記者会見通訳他 2007－2014在日大韓基督教船橋協会同時通訳歴任 **朴 ジョンヨン**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆この授業は終始楽しかったし、たくさん笑わせてもらいました。朴先生の歩んできた道のりや、なぜ日本に来たのか、日本に来て何をしていたのか、を教えていただきました。どの言葉も説得力があって、そうだなと思えるお話ばかりでした。それは朴先生が実際に歩まれてきた道のり、経験があったからだと思います。今の現状に満足せず自ら違う世界に入り込み、そこで成長していくことが必要だと感じました。（京都外国語大学・3年）

◆文化という言葉の意味について考えてみたが文化の特性として５つあげられる。世代から世代に学習する学習性、全体的に共有する共有性、引き継がれ蓄積される蓄積性、時代によって変化する変動性、他の文化と結合する総体性。文化とは人間がつくりあげたもの、人間にしかできないものだと思う。そういった面で文化という人間ならではのものを大切にしていかなきゃならないし、文化を通して人も繋がれる。そのことをもっと全世界の人と語れたらいいと思った。（京都外国語大学・2年）

◆文化とは何か、という話から、スポーツは文化なのか、一緒に考えることで、自分の中でスポーツ文化というものへの意識が出てきたと思います。また、スポーツの多様性や本質などを知れたことで、スポーツへの関心が深まりました。（神田外語大学・1年）

◆ある韓国人スポーツ選手のスピーチの映像を見ましたが、実際話ししている事と翻訳字幕が異なっていて、字幕を見ている人はその人に誤解を生む可能性もあります。確かに翻訳字幕をするにはにはいろいろいろいろルールがありますが、それ以前に本人が話している事と同じニュアンスにしないといけないと思いました。（長崎外国語大学・4年）

9/8(木)	通訳・翻訳技法①②（受講言語：韓国語）	
講師	神田外語大学アジア言語韓国語専攻 講師 2008年 高麗大学（韓国）韓国語教師育成課程（日本地域）修了 韓日字幕・吹き替え翻訳者。2016年神田外語大学字幕制作チームにて翻訳した映画「探偵なふり」の監督を担当 **本田 恵子**	神田外語大学アジア言語韓国語専攻 講師 会議通訳 NHK BSワールドニュース通訳 **孟 信美**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆本田 恵子先生: 映像翻訳について学んだ。今までドラマや映画で自然と字幕つきのものをみてきたが、その翻訳方法が思っていた以上に難しいことを感じ取れた。まず最初に秒数や字数がしっかり決まっておりなるべく短い言葉で伝えるということである。実際自分達でも挑戦してみたが案外言葉のニュアンスを伝えるのが大変難しかった。またみんなにわかるような言葉で意訳するというのもわかった。また自分達も映像翻訳をやってみて実際映像に自分達の翻訳がでると不思議な気持ちだったけど嬉しくて楽しかった。とても達成感があった。（京都外国語大学・2年）

◆本田 恵子先生：ニュアンスは同じでも言語が違うと直訳するだけでは伝わらないのだと分かりました。意訳だけではなくその国の歴史や文化を踏まえて通訳・翻訳しなければいけないのでそこが難しかったです。日本での普通と韓国での普通はもちろん違いますが、それを共有していかに自然に相手(観る側)に伝えるかが大事なのだなと思いました。（長崎外国語大学・4年）

◆孟 信美先生：スポーツにはたくさんの専門用語があり、通訳の現場ではそれを調べる間もなく一瞬で理解し訳していかなければならないので本当に大変であり、事前の予習が重要になると感じました。専門用語がわからなければ話自体がわからなくなるため、話の要点をまとめることもできなくなってしまいます。講義の中でのスポーツの専門単語を訳していく、という中で、日本語と似ている単語もありましたが全く違うもの、知らなければ別のものと勘違いしてしまいそうなものなど様々あり、難しいと感じました。その単語の意味を分かった上で日本語らしく訳す、という部分にも意識をしなければならないので一瞬のうちに頭をフル回転させなければついていけないな、と思いました。また、知らない競技があっては話にならないので日頃からスポーツに触れて、名前はもちろん、ルールやポジションなども理解しておくべきだと感じました。（神田外語大学・3年）

◆孟信美先生：通訳者として単に語学力があるだけではなく、特にオリンピックの通訳ボランティアは、競技名や競技の際に使われる用語まで勉強していないと全く通訳ができないと学びました。ボランティアをする際は少なからず、その仕事についてあらかじめ知るという事が必要なのだと感じました。（長崎外国語大学・4年）

9/8(木)	比較文化論（受講言語：スペイン語）	
講師	神田外語大学イベロアメリカ言語学科スペイン語専攻 講師 専門はスペイン語言語学 マドリード自治大学 修士（スペイン語） **松井 健吾**	神田外語大学国際コミュニケーション学科IBC専攻 教授/副学長 メキシコ国立自治大学大学院修了 元HNKテレビ・ラジオ講師 **柳沼 孝一郎**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆松井 健吾先生:この講義では、日本人とは違うスペイン人のアイデンティティについて学びました。日本人は国民のほとんどが、日本人であるというのアイデンティティを持っています。それに対してスペインの国民は、スペインから独立した一つの民族だというアイデンティティを持っている人々がいます。また、スペイン語といっても、カスティーリャ語、カタルーニャ語、バスク語、ガリシア語があります。スペイン憲法では、それぞれが話されている州では公用語として認めています。これらは、日本とは大きく違うことですが、スペイン語を学んでいる以上、このようなことは受け入れ、スペイン人と話す上で、そういった考えを頭の隅においておく必要があると思います。（関西外国語大学・2年）

◆松井 健吾先生：かねてより疑問を持っていた「～人」の定義や根拠についての講義に始まり、「国家」という感覚の認識についてグループで議論があった。特にスペインにおける地方の言語の「～語」と「～方言」の違いが自身にとって非常に興味深かった。今までその区別の境目に疑問を持つことがなかったため大変新鮮で新しい発見だった。普段スペイン語を勉強する身であるが、国の特徴であったり文化への理解がまだまだ足りていないのだと自覚が出来た。

◆柳沼 孝一郎先生：この講義では、柳沼先生が多くの資料をくださり、スペイン語圏地域について深く知ることができた。先生のパワーポイントによる写真の数々から、スペイン語圏地域の奥深さ、言語だけでなく、地球、宇宙規模まで考えさせられた。スペイン語を話すことで、日本では体験できない多くのことを知り、これからは体験できると思うとワクワクする。（神田外語大学・3年）

◆柳沼 孝一郎先生：一番印象に残ったのは、言語というのはツールであるが相互理解をするためには欠かせないものであり、ツールは使えば使うほど手になじむため習得した言語を活かす練習をすべきだという主張である。実際日本で、卓上で勉強することは十分だが話すという行為が出来るのは少ない。手っ取り早く出来ることはスペイン語ないし多言語が話されている環境に身を置くということであり、習得するのも早い。自身の経験で、スペイン語を話すことが出来、多文化も理解出来るようになったと自負しているが、世界はまだまだ広いので自分の可能性を広げるために新しいチャレンジをしてみたいと思った。（京都外国語大学・4年）

9/8(木)	通訳・翻訳技法①②（受講言語：スペイン語）	
講師	神田外語大学イベロアメリカ言語学科スペイン語専攻 講師 フェロー・アカデミー講師 専門は映像翻訳法 **渡部 美貴**	神田外語大学イベロアメリカ言語学科スペイン語専攻 准教授 専門は言語学、外国語教育、認知言語学 **アルセニオ サンス リベーラ**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆渡部 美貴先生：この講義では、実際に翻訳を行うことによって、訳し方の難しさや、言語以外の知識を持つことの大切さを学ぶことができた。私が、この講義で一番驚いたことが、海外の人物名をスペイン語に訳すと、名前が変わるということだ。普段のスペイン語の授業で学ばないようなことを、この講義を通して知ることができ、自分自信の知識向上につながったと感じる。（関西外国語大学・2年）

◆渡部 美貴先生：スペインのフラメンコ映画「Flameoco Flamenco Sinopsis」のパンフレットの文章を日本語に訳す作業を体験した。翻訳は自身にとって憧れの職業であったのもあり、普段触れているスペイン語を利用しての講義は大変有意義な時間となった。自分で訳してみた時にも感じる難しさはあったが、いざ先生の訳された一例を見てみるとただ翻訳すること以上にその物の対象者の年齢層やどういう知識を持った人に読まれるものであるのか、という細やかな気配りがあり、読み手のことを考えた翻訳であった。ただ辞書通りに訳す以上に大切にしなければならないことがあるのだということを身をもって体感することができた。これは翻訳に限らず、いざボランティアの現場に出た時にも欠かせないものだと考えると、自分の立場と異なる人々ともっと交流をすることで相手の求める知識であったり情報を提供できるようになれるのではないかと考えるきっかけとなった。（神田外語大学・2年）

◆アルセニオ サンス リベーラ先生：翻訳は、通訳と共通する部分もあるが違う部分もあるということを感じた。特に日本語の独特のニュアンスを外国語に訳すためにはまず、日本語を理解しなければならず、日本語が母語であっても難しいものだと感じた。（京都外国語大学・4年）

◆アルセニオ サンス リベーラ先生：この授業では通訳法を学んだ。通訳というのは考えていた以上に大変なことであるというのをこの講義を通して知った。普段何気なく使っている言葉を訳すというのがこれほど難しいのかと、まだまだ自分の語学力の足りなさにがっかりした。まるで通訳がいないかのように人と人とが話せるような通訳者になってみたいと夢を持つことができた。（神田外語大学・3年）

9/8(木)	比較文化論（受講言語：ポルトガル語）
講師	神田外語大学イベロアメリカ言語学科ブラジル・ポルトガル語専攻 講師 専門は文化人類学（博士） ブラジルにて長期調査 **奥田 若菜**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆先生の通訳のお話を聞いて、幅広く、偏らずに情報を得ることを心がける事が大事だということを学びました。「通訳で大変なのが、雑談。」とおっしゃっていて、確かに、相手が話す内容を理解して、心にスッと入っていけなければ、通訳どころではないなと思いました。また、大学名、機関名、法律用語、政党名などの難しい略称も覚えておかなくてはならないので、通訳という仕事の厳しさを感じました。そして、ポルトガルの通訳となれば、8カ国の通訳をすることになり、かつ、地域によって言葉の意味が変わるので、通訳をされている方の凄さを感じました。とにかく覚えることも大事ですが、その場で分からない言葉が出てきたときに、どのように対応できるのかが通訳として、重要なことだと思います。奥田先生の授業の中で、印象に残ったのが、日本の中で言いたいことが伝わっていないが故に、自閉症とみなされてしまっているブラジル人の子供達が多くいるということです。お互いが気持ちよく暮らしていくには、言語は本当に欠かせないものなんだと感じました。（神田外語大学・1年）

◆在日ブラジル人の問題に詳しく理解することができました。また今まで集住地の問題しか考えてなかった私ですが、講義を通して集住地でなくとも日本にいる全ての在日ブラジル人やポルトガル語話者の方に支えが必要なんだと気づくことができました。語学を勉強しているので、視野を広くして、人々の支えになりたいと感じました。また東ティモールには以前から興味がありました。何もないと思っていましたが、先生の話を聞いてぜひ訪れてみたいと思いました。語学を生かし人々を支えたいと改めて感じることができました。（京都外国語大学・4年）

◆日本でブラジル人が増え、日本語教師や学校、警察、役所、病院などでポルトガル語の通訳が必要となった。特に病院での医療通訳は不足していて、専門的な訓練を受けていなかったり、語学力が不足していたり、通訳に対しての報酬が低かったり、通訳常駐の医療機関が少ないなどの課題がある。語学だけでなく、知識も必要である。ポルトガル語はブラジルで使われるポルトガル語とアンゴラや東ティモール、ポルトガルが使うポルトガル語に分かれているので、その国の歴史や機関や法律用語などの略称などの知識が必要である。そしてブラジルでは階層による対立があり、方言やストリートで使われるスラングではなく、文法的で知的であるポルトガル語を心がけ、間違った話し方をしないように気を付けなければならない。だから、これからはポルトガル語圏の文化的背景を学び続け、通訳、翻訳するときはその分野の情報を得て、できるだけ準備をし、相手が話すポルトガル語が自分の知っているポルトガル語であるとは限らないということを理解していくことが必要である。（名古屋外国語大学・1年）

9/8(木)	通訳・翻訳技法①②（受講言語：ポルトガル語）	
講師	神田外語大学イベロアメリカ言語学科ブラジル・ポルトガル語専攻 准教授 （元）外務省専門調査員、国連平和維持活動選挙監視員 国際協力機構（JICA）長期派遣専門家として活躍 **高木 耕**	千葉県生まれ 1978年~1980年 在日ブラジル大使館勤務 1991年~ 鹿島アントラーズ、日本サッカー協会（JFA）でジーコ代表監督の専属通訳者 **鈴木 國弘**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆高木 耕先生：特に印象に残った話は、通訳をするにあたっては、語学が出来るだけでは駄目で、どうすればいいか分からない状況に陥った時に自分が何をすべきなのかを自身で考え判断しなければならないという話だった。通訳においては常に何が起こるか分からないという事を頭におき、行動しなければならないという話には頷くところが多かった。また、通訳は一歩一歩の地道な努力の積み重ねによってなるという話を聞き、ますます一層努力をしていきたいと思った。（京都外国語大学・4年）

◆高木 耕先生：この講義では、通訳をする際には瞬間的に他の言語に変えなくてはならないため、非常に高い能力が必要だと分かった。講義中に高木先生が、テレビのチャンネル一覧をポルトガル語にその場で訳しているのを聞いて、自分にこれができるようになるのだろうかと思ったのと同時に、こういう事が出来るのが普通になるくらいになりたいとも思った。（神田外語大学・1年）

◆鈴木 國弘先生：この講義は先生の実体験を元にどうやって通訳者になったのかや、通訳で重要なことを学んだ。通訳対象者が喋ったことをいかに簡潔にわかりやすく発信するかが大事。ジーコ監督というとても偉大な人の通訳をしていた人と会う機会なんて今後あるかもわからないのでとても貴重なチャンスをいただけたことに感謝しています。（京都外国語大学・4年）

◆鈴木 國弘先生：通訳は信頼関係がとても大事で、積極的に行動することが大切である。その国に対しての知識が通訳の時に役に立つ。相手の立場になって考えて、状況に応じた行動をするべきである。疑問があるときは素直に聞くことも大事である。（名古屋外国語大学・1年）

9/9(金)	インバウンド・観光戦略の動向
講師	兵庫県生まれ。米国ウィスコンシン大学マディソン校卒 株式会社やまとごころ 代表取締役 インバウンド（訪日観光）ビジネスコンサルタント **村山 慶輔**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆大学二回生のときに、「外国人観光客をもっと多く日本に呼び込むには」というタイトルでエッセイを書いている。その時に、自分流のアイデアをいくつか記述したが、村山氏が紹介された物は更に創造的であり、感心させられた。相撲・ちゃんこ鍋試食会や、黒門市場見学ツアーである。外国人の希望・要求をいち早く感じ取り、即、対応する村山市の行動力に驚かされた。健康形態の変化と共に、既存の観光にないものを求める外国人観光客に対応出来る力も通訳ボランティアとして、身につけたいものである。（関西外国語大学・4年）

◆インバウンド・観光は東京オリンピック・パラリンピックの行われる2020年に向かって今後も伸びていくだろう。しかし、重要なのはその後、いかにして日本にインバウンドを惹きつけ続けるかということである。日本人の目線ではなく外国人の目線に立つことで、彼らは何を求めているのか、日本のどこに魅力を感じているのかを踏まえたうえで、その魅力を実感できるような環境を作ることでインバウンドを継続して呼び込み続けられると感じた。（神田外語大学・2年）

◆この村山先生の講義を聞いて、観光業にも少し興味を持った。現在、第5回学生英語プレゼンテーションコンテストにも応募する予定で、今回の話をもとに内容を考えていくことが出来たらいいなと思っている。（京都外国語大学・2年）

◆訪日観光の３つの価値として、日本人の気質、作品、生活が挙げられていました。日本人の私たちにとっては田舎の風景が外国人目線だと魅力的であったり、小学生の通学風景が安全の象徴であったり、日本人としては、あたりまえの風景が外国人からすると違った風に見えているということに驚きました。そういったところに焦点をあてると、地方こそ世界を舞台に勝負できるということがわかりました。（長崎外国語大学・3年）

9/9(金)	アスリートから学ぶ人間力
講師	筑波大学体育系准教授 1984年 世界柔道選手権金メダル 1978年~1987年 全日本女子柔道体重別選手権10連覇 1988年 ソウル五輪銅メダル 日本オリンピック委員会（JOC）理事、全日本柔道連盟監事、日本バレーボール協会理事、日本サッカー協会理事、東京都教育委員 **山口 香**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆柔道のアスリートから学ぶ人間力は私に良い刺激を与えてくれた。講演の中でチャンピオンになるために一番大切なのは「考える力」だと思った。「なぜ？」という意識を常に持ち、自問自答することでより良いパフォーマンスをするためにどうすればよいかわかり、結果も出てくるのではないかと思った。山口先生の講演で学んだことは、スポーツの選手だけではなく、私たちも活躍するために常日頃から意識がけることであると考える。（関西外国語大学・4年）

◆チャンピオンには小心者が多く、だからこそ運任せにしないで準備を入念にする、しかしながら本番では大胆戦えるから勝てるという部分の話が本当に身に染みた。これから私の座右の銘を、山口先生が言っていた「繊細な心で準備して、大胆な心で勝負する」にしたいと思ったほどである。いつも自分でなぜ？と考える、思い通りにならないと思って行動していくなど、日々の生活、これからの就職活動で、慌てず進み続けることに必要なことばかりを知ることができた。（神田外語大学・3年）

◆アスリートの人々は、常に自分の感情をコントロールし、自分がどうするべきなのかを瞬時に判断し、決断できる力を持っている。また勝つために完璧な基礎力と徹底した準備している。つまり、彼らは勝負のために自立と自律を行っている。この考えは、勉強や人生の生活にも通じる。私もこの考え方をこれからの生活に取り入れていきたい。（京都外国語大学・2年）

◆心構えを変えることで未来が変わるのだと思いました。繊細な心で準備、訓練をすることの大切さも学びました。自分が苦手だなと思う人であっても避けないで向き合い、多様な人間関係を築くことのできる人になりたいと思いました。（神戸市外国語大学・4年）

◆自分の経験談を豊富に語っていただき、出る杭は打たれるが出すぎた杭は打たれないことを学んだ。（名古屋外国語大学・2年）

9/9(金)	グローバル化と音楽	
講師	米国Berklee College of Music Professional Music Major Guitar Department卒 2005年~2008年島村楽器ミュージックスクールギター科講師 **吉原 聡**	米イェール大学卒（哲学・政治学）。同音楽院にてチェロの研鑽を積む。 チェロ演奏活動に加え、2015年よりリベラルアーツ塾ライシアム代表。 ウェブサイト: www.christophersgibson.com **クリストファー 聡 ギブソン**

参加者課題『講義レポート』より　※編集の都合上，一部表現を編集しているものがあります

◆ここまでずっとスポーツだったのになぜ音楽なんだろうと始まる前は少し不思議に思っていましたが、講義を通して音楽は世界共通の、時にはツールとなるものだとわかり、言語が違っても共感したり感動を分かち合えるという面ではスポーツと同じ存在だと思いました。楽譜の音符の読み方は違えど、譜面が読めれば国籍が違っても一緒に演奏できる、それは当たり前だと思っていた自分がいましたが本当にすごいことだなとこのセミナーの最終日の最後の講義だったからこそ強く感じることができました。（関西外国語大学・2年）

◆世界にはたくさんの言語があって、それぞれのルールがあるが、音楽は12音階が世界共通であるというところがおもしろいポイントであった。音の高低で感じる人間の感情がどこの国でも同じように感じるのは初めて聞いたので音楽は素晴らしいと思った。このような素晴らしい音楽は、言語だけでなく、コミュニケーションツールとして使えるのではないかと思った。（神田外語大学・1年）

◆「様々なジャンルの音楽を聴くことは異文化理解にも繋がる」と言ってとても納得がいきました。確かに国や地域ごとに曲の雰囲気、使っている楽器の違い、リズムの違いなど、同じ音楽でも全然違います。その違いがその国の背景を表しているのであれば音楽は素晴らしい異文化理解の材料だとおもいました。実際に前でチェロとギターで今までに見たことのないセッションをなさっていてとても面白かったです。（京都外国語大学・2年）

◆今回の講義で、音楽は国を越えて活用することが出来ることを学びました。特に「共感」というワードが印象に残っており、言葉も音楽も共感できる部分を感じることが、グローバルの手立てとなることを知りました。先生方の演奏も聞かせていただき、音楽でのコミュニケーションが言葉や文化の違いを越えて、世界をひとつに出来る力があることを強く感じました。今後さらに音楽とグローバル化の関わりを学んでみたいです。（名古屋外国語大学・4年）

5. セミナーの様子（写真）

▲神田外語大学長より挨拶

▲韓国より金キホン氏が来日

▲和泉元彌師らによる日本文化理

▲アドベンチャーコミュニケーションプログラム

▲懇親会

▲全国の外大生が自由に交流

▲受講者367名